



LINKAI 横浜金沢

学生が取材に行く

～企業の取材に行くので、怖い企業だと嫌だなと思ったら、働く人達は気さくで良い人が多く働きがいのある職場だったと気づいた件～

企画 & 制作: 横浜市金沢区役所区政推進課
取材 & 協力: 関東学院大学・横浜市立大学
2023年3月発行



LINKAI 横浜金沢

学生が

取材に行く

働きがいのある職場

企業の取材に行くので、怖い企業だと嫌だなと思ったら、働く人達は気さくで良い人が多く

だったと気づいた件



関東学院大学
×
横浜市立大学

学生による学生のための
LINKAI 横浜金沢

LINKAI横浜金沢は 日本有数の産業集積地

埋立てから50年。
かつて海だったこの場所で、多くの人や企業が
日々、新しい価値を生み出しています。

「鳥浜工業団地」と「金沢産業団地」、
2017年に「金沢臨海部産業活性化プラン」を策定し、
2つを合わせた金沢臨海部産業団地の地域の名称として
「LINKAI横浜金沢」と名付けました。

“LINKAI”(りんかい)には臨海部の意味の他に
LINK(絆/つながり)とAI(愛/合い)の二つの意味があり、
この名前には、
「多くの中小企業が集まり操業する、働く魅力のある地域に、人が集まり、
共に将来へ進みたい(つなぎあい、えがくみらい)」
という思いが込められています。

LINKAI横浜金沢の企業数
(東証プライム上場企業も含む)

1,233社

(平成28年度 経済センサス)

LINKAI横浜金沢の従業員数

34,808人

(平成28年度 経済センサス)

2つの4年制総合大学の在籍学生数
関東学院大学+横浜市立大学

約16,000人

(各大学HPより)



LINKAI横浜金沢の魅力

■多様性

LINKAI横浜金沢には、卸売業・小売業、製造業、運輸業、サービス業、建設業など多種多様な業種の企業が集まり、さまざまな顧客ニーズに対応しています。



■就業環境

シーサイドラインを挟んで、西に有名建築家がエリアごとデザインした住宅エリア、東に工業エリアが広がっています。その間にある緑地帯(グリーンベルト)が、その2つのエリアを優しく分けています。西の住宅エリアに住んで、東の工業エリアに多くの人が通っています。



■憩いと賑わい

地域内には緑地や公園、海辺には遊歩道が整備されています。シーサイドライン沿線には、横浜・八景島シーパラダイス、海の公園、アウトレットや大型会員制量販店などの大型ショッピング施設もあり、憩いと賑わいが両立しています。



■やはり人

LINKAI横浜金沢の人の中には、働くだけでなく、積極的に地域と関わろうとしている人達があります。企業や年齢の壁を超えて、地域への貢献を考え、人々を笑顔にする企画を立てている人たちがいます。このような人と人との交流もLINKAI横浜金沢の魅力です。



LINKAI横浜金沢の取組

大学や周辺地域等と連携したLINKAI横浜金沢のさまざまな取組を紹介します。

■地域を支え、共に歩む「横浜市金沢団地協同組合」と

「一般社団法人横浜金沢産業連絡協議会」ここにあり！

- ・地域の清掃活動
- ・横浜市金沢団地協同組合創立50周年
- ・PIAフェスタの開催
- ・新型コロナウイルスワクチンの職域接種の実施



■地域との交流がLINKAIを熱くしています！

- ・産学官連携ものづくり体験イベント「Aozora Factory」
- ・「海中探検ツアーin海の公園」
- ・地域の小学生を対象にした「ものづくり体験ツアー」

■LINKAI企業をどうぞ見に来てください！

- ・「テクニカルショウヨコハマ」にLINKAI横浜金沢ブースを出展
- ・「プレミアム探検ツアー」の開催



バス通り花壇活動



Aozora Factory



産業団地内一斉清掃



PIAフェスタ



海中探検



テクニカルショウヨコハマ

本誌のテーマ

学生による学生のためのLINKAI横浜金沢

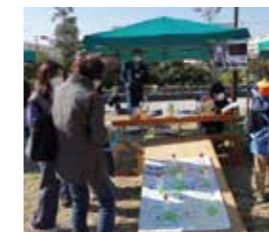
■本誌の取組

LINKAI横浜金沢にはたくさんの魅力があふれています。ですが、この魅力があまり知られていないのが現状です。

産業団地といってもそれぞれの企業がどういった製品をつくり、サービスを提供し、どのように社会に貢献しているのか。そこが見えてこなければ「働く魅力ある、人が集まる地域」を実現することは難しいでしょう。

そこで、金沢区の地域の強みの一つ、区内に立地する2つの4年制総合大学、関東学院大学と横浜市立大学に通う学生が、働く現場を訪問し、学生目線で取材をしました。産(企業・地域団体)学(大学)官(区役所)が交流・連携することで、地域の魅力発信に寄与していきます。

そして、多くの大学生に働く場所としてのLINKAI横浜金沢を認識してもらうべく、本誌を発行します。



学生が取材に行く

企業の取材にいくので、怖い企業だと嫌だなと思ったら、働く人達は気さくで良い人が多く

働きがいのある職場

だったと気づいた件

01-02

about LINKAI

03-04

LINKAI の取組 / 本誌のテーマ

05

CONTENTS

06-08

Students Symposium
関東学院大学 × 横浜市立大学

09-10

interview
大瀬工業株式会社

11-12

interview
株式会社加藤美蜂園本舗

13-14

interview
株式会社キュー・アイ

15-16

interview
株式会社光洋

CONTENTS

17-18

interview
株式会社中込製作所

19-20

interview
株式会社パーマケム・アジア

21-22

interview
藤森工業株式会社

23-24

interview
横浜環境保全株式会社

25-26

interview
横浜プレシジョン株式会社

27-28

interview
渡辺商事株式会社

29-30

編集後記



座談会

Students Symposium





★関東学院大学理工学部

化学学系 友野研究室

阿部真弓さん【あ】、佐藤匠さん【さ】

機械学系 堀田研究室

湯川剛さん【ゆ】、松原佑さん【ま】

玉川瑛斗さん【え】

★横浜市立大学国際教養学部

都市学系 中西ゼミ

栗原雅治さん【く】、谷勇輝さん【た】

根岸涼香さん【ね】、小澤伽奈さん【お】

■まず、LINKAI横浜金沢のことを知っていましたか？

【さ】「私は元々かわりがあり、地域の名前としては知っていましたが、ここまで色々な企業があることは知らなかったです。」

【ゆ】「私は名前も知らなかったです。」

【く】「自分たちの学部では、授業で横浜市の六次産業を勉強したので、金沢地先埋立事業とかで形成された場所というのは知っていました。でも具体的な企業のこととかは全く知りませんでしたね。」

【ね】「ものづくりの企業だけがいるイメージで、ものづくりといっても食べ物とかはなくて工業的なイメージがありました。」

【え】「自分が金沢区出身で、たまにカステラとかを買いに工場に行ったりしていました。」

【皆】「へー、カステラ買えるんだ。」

■取材でLINKAI横浜金沢へ行ってどのような印象を持ちましたか？

【く】「取材を通して、一つ一つの企業に個性があって、やってるこ

とも違って、そういうものの集まりなんだと知れて面白い地域だなと感じました。」

【ね】「小さい企業が集まっているのかなと思っていましたが、取材した藤森工業さん(p.21)は事務所と研究所とが併設されていて、規模が大きい企業もあるんだと知りました。」

■実際に職場や働いている人を見て、どのように感じましたか？

【あ】「横浜プレジジョンさん(p.25)の働いている人を見てみると、思ったよりも楽しそうに仕事をしているなと思いました。」

【ま】「僕は社会人の友人も多く“しんどい”とか愚痴を聞くから、つらいのかなと思ったんですけど、責任感を持って仕事していて、その意識がある人はすごいんだと素直に思いました。」

【く】「光洋さん(p.15)に取材に行って、対応してくれた社員さんがすごい熱意をもって仕事の話をしてくれたので、働くことの楽しさもあるんだと実感しました。」

■楽しそうに働いているという話がありましたが、皆さんの働くうえでのポイントは？

【さ】「私は教員志望で、横浜環境保全さん(p.23)に行かせていただいて、教員になったときに、授業の一環で地域や企業と協力することが生徒の学びに繋がられるかなと思いました。」

【ゆ】「キュー・アイさん(p.13)は設計から組立(製品の販売)まで全部やるとのことだったので、達成感がすごいらうなと思いました。」

【ま】「パーマケム・アジアさん(p.19)を訪問して、商品(工業用防腐剤)のために原料開発から始めるところに魅力を感じました。多くの人には知られていないですけど、そこがまたかっこいいなあと。」

【ね】「人が優しくったり、仕事に熱量を持っていたり周囲の環境が良いところがいいですね。私は長く同じ会社で働きたいと思っているので、働き続けられるところがいいです。」

【た】「人間関係ってすごい大事ですね。私が行った申込製作所さん(p.17)は自分たちを温かく迎え入れてくれたので、大事なポイントです。」

■取材して印象に残っていることは何ですか？

【さ】「大瀬工業さん(p.09)が“従業員をととても大切に”とおっしゃっていて、取材で言えるってことはすごいことだなと印象に残っています。」

【お】「渡辺商事さん(p.27)は介護用食品とかを取り扱っていて、普段私に関わることがないものだからこそ、そういった企業があることで社会が成り立っているのかなと感じました。」

■LINKAI横浜金沢がこうなるといいなという改善点がありますか？

【さ】「工場見学をもっとやると企業の良さやLINKAI横浜金沢の魅力発信できるんじゃないかなと感じていて、実際に見る機会があった方がいいんじゃないかな。」

【あ】「でも、工場見学というもののハードル自体が少し高いと思う。興味を持って工場見学へ行こうとはなりにくいと思うので、Aozora Factoryさん(p.03)がやっているものづくり体験イベントをやることで、魅力が伝わるんじゃないかな。」

【た】「食品の直売所(※)があったので、安く買えたり、新鮮さをもっと売り出して、工業団地けどその側面にフォーカスするのもおもしろいと思います。」

(※編集注:加藤美峰園本舗さん(p.11)など複数企業に直売所あり)

■冊子の次のステップとして、LINKAI横浜金沢の魅力発信するコンテンツは何が有効だと思いますか？

【ま】「企業の合同説明会があるといい。こっちからなかなか行けないので、大学に来てくれるといいと思います。」

【ゆ】「SNSですかね。Youtubeで工場見学の動画をあげてみたり。とっつきやすくするのがいい。やっていることは魅力的なので興味を持ってくれると思います。」

【あ】「LINKAI横浜金沢の製品自体がBtoBが多いかなと思うので、どうやって知ってもらうかですね。」

【え】「マスコットキャラクター作るとかかな。」

■全体の感想は？

【さ】「実際に行くことが大事だなと感じました。LINKAI横浜金沢に対する解像度が上がりましたし、今回みたいに学生同士で話すことでもっと解像度が上がるという点でも良かったと思います。就職活動にも非常に役に立つと思います。」

【ゆ】「行く前はちょっと怖かったです、企業へ取材に行くのが、でも、行ってみたら会社の人も優しく、いろいろなところを見せてくれて。」

【ね】「そうですね、行く前と行く後でイメージが変わったので、知らないまま手を付けられないのはもったいないなって感じています。」

【お】「取材行く前にインターネットでいろいろ調べてたんですけど、文字で見る情報と目で見る情報は大きな違いがあるなと感じました。」

【く】「LINKAI横浜金沢は工業団地なので取材するまでは、文系の自分には関係ないというイメージがあったんですけど、サービス業とか営業とかいろいろな仕事があって、多種多様な企業さんもあって自分にも関係あるなと思いました。」



Interview with 大瀬工業株式会社 by：関東学院大学 / 岩瀬将、長谷川陽南子、松本亜優、常盤琴美、花谷明信、大川諒輔

あなたも「誠実」を形にしませんか



板金加工(三次元レーザー加工、プレス加工)、機械加工を行なっている。
 私たちが気付かずに目にしている機械部品から自動車のパーツまで取り扱っている。
 ひとつひとつが誠実さを形にしている企業である。



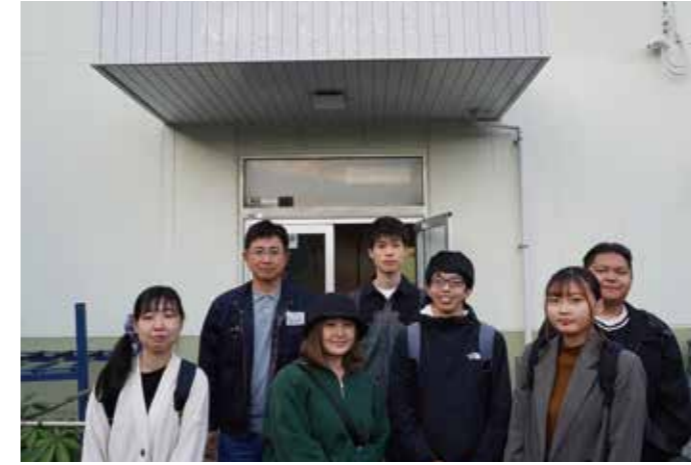
加工技術の大切さを背負っている 大瀬工業

社長の大瀬雅博さんはこう言います。「大瀬工業の仕事は誰でもできる仕事かもしれませんが、誰もができる仕事ではありません。その仕事を誠実に続けているのが大瀬工業です。」

大瀬工業さんは板金加工を、他社から請け負って仕事をしています。板金加工とは、金属の板をプレス/レーザー加工、曲げ加工、溶接加工、塗装の流れで加工することです。板金加工は、私たちが身近に使う製品のパーツとして使われる非常に大切な技術です。しかし、この作業は技術的にも肉体的にも大変な仕事です。プレス作業は、角度と形を、ひとつひとつ細かく設定し金属板をプレス機に入れて押しつぶすことで加工します。最初にわずかでも間違えると、部品として成立しない繊細な作業です。次の溶接作業は、プレスされた金属板同士をつなぐ作業です。溶接作業は人の手が直接介する作業です。最後に、塗装機に金属板を入れ、塗装することで完成します。これらの作業を通して作られた部



品は、私たちの身近な生活を支える部品として使われています。しかし、私たちが直接この部品を知ることはありません。大瀬工業の皆さんが誠実に部品を作り続けてくれることで事故がないため、私たちはその誠実な仕事が行われた部品の存在を知ることもなく、毎日を過ごしています。



働きやすい従業員の環境づくりが第一

大瀬工業さんは、「自動車部品の作製」を行う鶴見の小さな工場から始まりました。金沢区に拠点を移してから、自動車部品や医療用器具の加工、組み立てまでの一貫体制の構築を行い、顧客の期待に応じてきました。73年に渡り、顧客の期待に応えられてきたのは大瀬工業さんで働く社員の「働きやすさ」を第一に考えているからと大瀬社長は言います。社是は、「誠実」「自己に誠実であれ」「企業に誠実な行動」「顧客に誠実に接す」お客様にも、自分たちにも常に誠実であり続ける。これが大瀬工業さんの理念であり、社長の大瀬雅博さんは、「目配り、気配り、思いやり」を大切にしてお金だけでは人は動かないという信念のもと従業員を大切にしています。優先順位は、1位が従業員、2位が顧客という従業員第一としていることや、自分の意見を取り入れることが出来る風通しの非常に良い企業であるなど、働きやすい企業であることが伺えます。



Interview with 株式会社加藤美蜂園本舗 by：横浜市立大学 / 蓮井美希、山神碧伊、神崎篤弥

自然そのままのハチミツを食卓にお届け！ サクラ印ハチミツで有名な会社



株式会社 加藤美蜂園本舗(以下、サクラハチミツ)は、世界各地で採れたハチミツを製造、販売する会社です。1番美味しい状態の採れたてのハチミツを味わえるようにシンプルな製法にこだわりつつ、国内の特産品とハチミツのコラボレーション商品を打ち出すなど、養蜂家と消費者のパイプ役として、進化し続けています。



サクラハチミツさんはサクラ印ハチミツを始めとする一般家庭用と業務用のハチミツを製造している会社です。

突然ですが、みなさんは、人間がハチミツを採取することが自然の邪魔をしているのではないかと考えたことはありませんか？実はその逆で、豊かな自然を育むことにハチミツ採取は貢献しています。ハチミツを採取することでミツバチは更に蜜を求めて活発に活動し、受粉が促進されます。そしてそれが、植物の繁栄と自然の豊かさに繋がっています。つまり、ハチミツ採取は自然の営みのサイクルの中にあるのです！

今回はそんなハチミツを扱う会社、サクラハチミツさんにインタビューを行いました。

最初に社員の方がおっしゃっていて驚いたのが、世界中どこでも、花が咲くところには必ずミツバチがいてハチミツを収穫することが

できるということです。しかし、採取したハチミツを運ぶ船や港が無ければハチミツは販売できません。長い時間をかけ、各国の養蜂家と信頼関係を築き上げたそうです。

次に、特に力を入れている活動について伺ったところ、SDGsの17番「食品ロス削減」に向けた活動にも力を入れているとのこと。そのひとつとして横浜工場直売所では、通常商品のほかに「賞味期限が近いもの」や「少し結晶している製品」「デザイン変更による旧品」など“訳あり商品”をお手頃価格で販売しています。天産物であり、どうしても高価になってしまうハチミツですが、手にしやすい価格で販売することで、幅広い世代の方に召し上がっていただき、さらに食品廃棄を減らせるよい機会となっているようです。直売所には近所の方はもちろん、遠方からもSNSを見た多くのお客様がいらっしゃいます。広い世代と地域の人にアプローチを欠かさないと、それがサクラハチミツさんの特徴であると感じました。



そして自慢の技術について伺いました。

通常では粘度が高くてろ過できないハチミツを、UF(ウルトラフィルター)膜に通す技術によってタンパク質を除去したハチミツを、サクラハチミツさんが世界で初めて製品化したそうです！この技術により、飲料メーカーがハチミツを使用することが出来るようになったので、企業向け製品の販路が拡大しています。

このように奥深いハチミツの世界ですが、大学生など若者がまだまだハチミツに触れる機会が少ないと思います。

実際に、社員の方はこのことを危惧していて、ぜひ若者に沢山ハチミツを食べて欲しいとおっしゃっていました。ハチミツの味を若者に知ってもらうため、たとえば、私達大学生の学園祭の「出店でハチミツを使用した食べ物を販売」したり、「ゲームの景品として使用するのに提供」することも考えて下さっています。詳しくは、サクラハチミツさんに伺ってみてください！

最後に、就職を控えた学生が学生時代にしておいた方がよいことを伺いました。

まず“色々な経験をする”ことが大事だそうです。インタビューさせていただいた社員の方は、ハチミツを今よりもっと多くの人に食べてもらいたいという熱意に溢れていて、食に携わり多くの人を幸せにすることにやりがいを感じていらっしゃいます。

インタビューを通して、サクラハチミツさんは、ハチミツをより多くの人に提供できるよう情熱を持って真摯にチャレンジし続ける社員さんがいる素晴らしい会社であると感じました。



Interview with 株式会社キュー・アイ by：関東学院大学 / 玉川瑛斗、榎隆杜、湯川剛

人々の安全と安心をサポートする会社 キュー・アイ



私たちが生活していくうえで大切なことがあります。それは「点検」です。乗り物や機械など点検をすることで人は安全に暮らしていけるのです。しかし、点検をするにも人の手が届かない場所や水中のような記録を取ることに難しい場所もあります。株式会社キュー・アイでは、そのような点検の難しい場所での点検をサポートするロボットを作っています。

私たちは、株式会社キュー・アイへ行き、暮らしを守るロボットの魅力や社員さん取材しました。



業務内容や製作物、株式会社キュー・アイの魅力に迫る

工場は1~4階まで見学させていただいて、1階は切削台や、水深2m、直径5~6mほどの水中ロボット試験用のプール、2階は電気系作業部屋、3階は機械系作業部屋、4階は会議室となっていました。

キュー・アイさんは、作業を3つほどに分担しています。主に書類を扱ったり、物を作る際に必要な部品を発注したりする『購買課』、物の大きさや形の設計・製図・製作をする『機械系』、その物を動かすために必要な電子回路を作る『電気系』で、それぞれ専用の部屋に分かれています。

まず初めに、『購買課』ですが、見学した際、書類の多さに驚きを隠せませんでした。ショーケースのようなものに書類がびっしりと並べられていて、大変そうだなと一目でわかる部屋でした。続いて、『機械系』は、CADを用いて製図し、さまざまな機械を用いて製作をしていました。最後に、『電気系』です。機械系で製図された図を元に電子回路を作成し、組み込む作業をしていました。

キュー・アイさんは、水中ドローンや狭い管の中を調べることができるロボットが代表的で、1番活躍しているのは、特殊車両として登録しているハイユースに、管内撮影用のロボットカメラを搭載したのだそうです。キュー・アイさんの方々は『自分で作りたいと思った物を作れる。それが完成した時にやりがいを感じる。』と話していました。そこにキュー・アイさんの魅力があるのかもしれない。



株式会社キュー・アイの若手社員さんやベテラン社員さんに質問しました。

玉川：どんな時にやりがいを感じていますか？

若手社員1：弊社では、設計から組立、納品までを一貫しておこなっています。そのため、製品が完成して、最後にお客様へ納品したときにやりがいと達成感を感じています。

玉川：学生の頃にやっていた役に立ったことはなにかありますか？

若手社員2：学生のときには、機械いじりなどの経験を積むこと座学ばかりをやるのではなく、しっかり手を動かすことが大切です。

玉川：働くうえで常に心掛けていることはありますか？

ベテラン社員1：お客様目線にたって製品の仕様や機能などを考えています。

湯川：カメラや機械構造などを作る際に最も重要としている部分はどこですか？

ベテラン社員2：点検などで使用する機器ですから、何よりも信頼性を大切にしています。

玉川：どんな人を採用したいですか？

ベテラン社員2：チャレンジ精神が旺盛で、物作りが好きな人が欲しいです。また、コミュニケーション能力が高く初対面の人とも緊張せず話せるような人を採用していきたいです。



感想

今回、キュー・アイさん取材して感じたのは、お客様との信頼関係や品質をととても大切にしている会社だと感じました。品質を追求するために試行錯誤を繰り返すこと。このことが最終的に、お客様からの信頼に繋がっていると思いました。この冊子を見て株式会社キュー・アイに興味を持った方はぜひ調べてみてください。

Interview with 株式会社光洋 by：横浜市立大学 / 三澤菜緒、横井日向、栗原雅治

あらゆる分野から人々の 幸せな生活をサポートする、そんな会社



株式会社光洋は医療・健康・福祉に関わる総合会社です。オムツの会社として有名ですが、実はそれ以外にも福祉サービスやカフェ・コンビニなど幅広い事業を行っており、生活をあらゆる面からサポートしています。人々のQOL向上のために様々な工夫を凝らしています。



日本は現在、少子高齢化の一途をたどっています。医療や介護の分野においてもその影響は大きく、特に介護分野においては高齢者施設が全国に53,000施設もあるものの、それでも需要の増加に追いついていないほど福祉サービスの需要は増加しています。光洋さんはそのような現状の中で、医療・介護を必要とする方の目線に立って福祉サービスを提供している会社です。しかし、福祉サービスを提供している企業は数多いですが、光洋さんは幅広い事業が持ち味になっています。オムツの製造からコンビニ経営まで、食事から排泄まで、生活のあらゆる分野を一つの会社で網羅する、「トータルソリューション」をモットーとした、とてもすごい会社なのです。今回はそんな数々の工夫がなされた製品やサービスを見学・取材させていただきました。

最初の見学は大人用の紙おむつです。私たちはまずおむつの吸水力を試す実験を体験しました。500mlのペットボトルに入った水をおむつの内側に流しても水が溢れず、表面もまるで水を流していないかのような感触でした。オムツがすぐに乾燥するように作ることで、利用される方が不快にならないようにしているとのこと。他にも紙オムツを前後どちらでも履けるようにして介護をする方の負担を減らすよう工夫しているなど、利用される方々に配慮した製品を作られていることが分かりました。

次に見学させていただいたのはコンビニエンスストア事業です。金沢シーサイドライン市大医学部駅の中にあるセブンイレブンは、病院の患者さんが多く利用されるため、車いすの方に配慮した店内構造となっており、スタッフを多めに配置することで柔軟に対応できるようにするといった工夫がされていました。

最後はカフェ運営です。このカフェでもコンビニと同様の配慮がされているのに加え、焼き立てのパ



ンも扱っており、現場で働く人たちにも配慮したカフェになっていました。

これらの取材を通して、光洋さんの利用者を第一に考える姿勢、ケアをされる方だけでなくケアをする方にも配慮した製品やサービスづくりを感じることができました。

最後に、光洋さんの魅力についてご紹介します。光洋さんで働く上での魅力は、アットホームで働きやすい環境、カレンダー通りに休みがあり、ワークライフバランスに配慮されていること、社員同士の距離感が近いこと、一つ一つの仕事に責任感を持って取り組むことができる体制といった多くのことがあろうです。そして取材を受けていただいた社員さんからは、仕事に対する熱意をひしひしと感じ、実際に働いている方がやりがいを持って前向きに仕事をされているということも伝わってきました。また、取材の中で学生たちに期待することも伺いました。“どんなことにも熱中してやり遂げられる人や、他の人とコミュニケーションをたくさんとってたくさん失敗してきた、そんな学生が来てくれると嬉しい”そうです。皆さんも是非、学生のうちにたくさん挑戦して、たくさんのご経験を試みましょう！

今後は在宅サービスにも力を入れていくという光洋さんは、ケアする方、ケアされる方、そして社員さんにも配慮した素晴らしい企業だと深く感じ入りました。



Interview with 株式会社中込製作所 by：横浜市立大学 / 谷勇輝、山口輝

社員の声に耳を傾け、 進化を続ける中込製作所



株式会社中込製作所はスーパーやコンビニ、家電量販店などにあるレジ台やカウンター袋詰めするためのサッカー台などを製作している会社です。試作から完成品まで一貫して生産することができ、その様子を実際に見学させていただきました。その製品は神奈川県内に留まらず全国の様々な店舗に運ばれています。



中込製作所さんは創業昭和23年、スチール製品、オフィス家具、木製造家具を三本柱として製作している会社です。私たちの暮らしの中でよく見るものとしては、スーパーのレジ台、サッカー台などを製作しています。企業としての強みは、試作から完成品まで作ることができ、一貫生産ができることであるそうです。

取材にあたって、まず工場を見学させていただきました。そこには私たちと同じ年代の方々も熱心に働いていました。実際に見学させていただいたことで、一つのことを製作するのに多くの工程を踏んでいることや、機械の迫力などがわかりました。また、緻密な作業があったり管理が厳重なものがあったりと生産の実態を知ることができました。また、ここで働いている方々は適性に合った作業工程に配置されていますが、将来性を考えて様々な箇所でも仕事ができるようにも養成する方針だそうです。

見学後、社長や社員さんからお話を伺いました。社長の日向さんの就任当時、問題が山積みされていたそうです。そこで従業員の声に耳を傾ける体制を整え、社内を改革しました。従業員たちが作業で困っている

様子を見つけたらすぐに解決に取り組むようにした結果、これが皆のやりがいや喜びにつながっているそうです。お話を伺いながら、非常に情に厚い方だと感じました。また、社長は現状に満足しない性分で、周囲の反対を押し切って投資をしたこともあったそうですが、経営者としてただ将来性を見据えての判断だったようです。たとえば長年の使用による故障の可能性を踏まえて、新しい機械への投資はためらいません。その際、ハイスペックなものを購入することでその後の長期的な運用も視野に入れています。これは先述した従業員の声に耳を傾ける体制を作り上げたことにもつながっています。「やはり中小企業は変わっていかないと淘汰されてしまう。」これは社長の言葉であり、スピード感を大切にしているそうです。だから必要と考えられるあらゆる投資もためらわないのでいいのかも感じました。一方、気をつけていることはいかに短納期であっても、お客様に一旦約束したことは必ず守るという拘りです。絶対的な信頼を得るように必ず守っているそうです。

これからも積み重ねられた技術を伝承し

ていながら、新しいやり方もどんどん取り入れていくとのことでした。

コロナの影響はやはり受けました。受注が延期されたり、そもそもの計画が白紙になることもあったそうです。しかし、現在はコロナ禍以前に戻ってきているとのこと。また、ネット通販の普及で消費者がお店に行く可能性が減少しています。そうなるとレジ台などがいらなくなってしまうといった中込製作所さんの事業への影響も考えられます。それに備え、物流倉庫関連など新たな事業分野にも挑戦しているそうです。

求める人材や学生像についても伺いました。人生はうれしいこともあれば悲しいこともある、そのつらくて悲しい時を乗り越えられる胆力は必要であり、そのような学生を求めているそうです。社長の人材への考えや流儀は、「正しい考え×情熱×能力」とのことです。

取材を終えて、本当に素晴らしい方がたくさんいらっしゃる会社だな、本当に貴重な経験を得られたなと深く感じました。



Interview with 株式会社パーマケム・アジア by: 関東学院大学 / 松原佑、黒田凱斗、熊谷圭祐、鈴木大雅

私たちの身近でも使われているかも？ 株式会社パーマケム・アジアの薬剤



株式会社パーマケム・アジア鳥浜工場を訪問、取材させていただきました。取材を通して、普段は目にすることのない工場内部の様子やR&Dセンターでの医薬品原薬の開発過程を見せていただきました。

この記事では、会社の様子や、作っている製品などについて、実際に工場を見学し、働いている方へインタビューしてわかったことをまとめました。



はじめに、今回取材させていただいたパーマケム・アジアさんの概要を紹介していきます。パーマケム・アジアさんは、1956年10月18日に設立し、現在は東京都中央区に本社を構える歴史のある会社です。パーマケム・アジアさんは、ジェネリック医薬品原薬、電子材料、一般工業用防腐剤、繊維油剤用防腐剤、防かび剤、製紙用薬剤、抗菌剤・消臭剤と防腐剤を中心に、研究開発、製造をしています。東京にある本社以外にも、横浜市西区にある横浜事業所、横浜市金沢区にある鳥浜工場、R&Dセンター、静岡県菊川市の菊川工場、東海出張所、そして北海道の北海道出張所の合計7か所の拠点があります。今回は鳥浜工場を取材しました。

鳥浜工場とR&Dセンターは、金沢シーサイドラインの鳥浜駅を降りて約10分、LINKAI横浜金沢地区内の鳥浜工業団地にあります。このエリアには、BRANCH横浜南部市場や三井アウトレットパーク横浜ベイサイドなどの商業施設もあります。そのため、終業後にふらっと買い物によることもでき、とても働きやすい環境になっているそうです。最近では新型コロナウイルスの影響で実施できていないそうですが、希望者全員での社員旅行などの社内イベントや福利厚生も充実しているため、社員全員が安心して働くことができる会社だそうです。

パーマケム・アジアさんは、かつて製紙などで使用される薬剤を主に製造していたそうですが、現在ではジェネリック医薬品の原料となる原薬の製造や、衣料を製造するために必要不可欠な油剤防腐剤の製造が中心となっているそうです。この鳥浜工場では、毎月100トン程製造されており、国内の他、中国や台湾、東南アジアの国々との取引や販売も多いそうです。



この鳥浜工場で日々製造されている衣料繊維用の油剤防腐剤は、私たちも名前を知っている衣料品メーカーが衣類を製造する際に必要不可欠なものだそうで、私たちの身近にも多く使用されていることを知り驚きました。このように、パーマケム・アジアさんで製造された製品は、私たちが直接購入することはありませんが、生活に欠かすことのできない紙製品や医薬品、そして衣料品など、数多くの製品に使用されています。もしかすると、私たちが普段手に取っている製品にも、使用されているのかもしれない。

パーマケム・アジアさんの工場では、薬品を作っている関係上、どうしても有害な廃液が出てしまうそうです。工場の中には、製造を行うための大きささまざまな釜が並んでいました。同じ釜で異なる製品を製造する際には、この釜の中の薬品をきれいに洗浄する必要があります。洗浄のために釜の中に人が入ることは危険ですので、フラッシングによる洗浄や煮沸洗浄をおこないますが、その際に使用した薬剤などは有害な廃液になります。この廃液は全て産廃業者で処理をおこなっており、水質汚染に対する対策がおこなわれています。

このように、パーマケム・アジアさんには、従業員が安心して働くことができる環境があり、お客様にも喜んでいただける製品の製造を目指しています。

今回の取材を通して、パーマケム・アジアさんに訪問して、私たちがこれまで知らなかった薬品の製造、開発の現場を見ることができました。また、パーマケム・アジアさんがおこなっている社会への取り組みを知りました。この活動をとらして、「会社を知る良さ」に気づくことができ、とても良い経験ができたと感じています。



Interview with 藤森工業株式会社 by：横浜市立大学 / 土居陽平、根岸涼香、堀井咲希

「つつむ心」で寄り添い、 なくてはならない豊かさへ。



藤森工業株式会社横浜事業所では主に環境に配慮した容器包装の製造を行っています。併設された研究所で常に研究が重ねられており、より便利で、より環境に配慮した製品づくりに尽力しています。

私たちが取材に伺った藤森工業さんは、ウェルネス、環境ソリューション、情報電子、建築・土木資材の4分野の事業領域を持っています。特に横浜事業所は環境ソリューション事業の中心を担っているそうです。

具体的な製品としては、シャンプーや洗濯用洗剤の詰め替え用パウチなどを製造しています。皆さんもきっと知っているだろう有名な詰め替え製品が藤森工業製のパウチで販売されており、多くの人が目にし、手に取ったことがあるはず。国内シェアNo.1だけでなく、詰め替えに便利な注ぎ口を設けたパウチは中に入れる液体の特性などによって注ぎ口に特殊な加工を施すなど、技術とこだわりを持って製造されています。他にも、液晶ディスプレイの偏光板製造で使う保護フィルムは世界シェアNo.1、トンネル用防水シートは国内シェアNo.1といったように、素晴らしい実績を持つ企業です。生活の中で何気なく使っていたパウチにも、技術と気配りが込められていることにとても感銘を受けましたが、社員さん方のご説明とまなざしから、製品を思い、その先のお客様を思う気持ちが大事な



応できる能力を求めているとのことでした。それが企業にとっても良い刺激になるそうです。また製造業もお客様との会話が重要であるため、コミュニケーション能力はあるに越したことはないとのこと。三つめは学生のうちしておくべきことを伺いました。具体的なことを想定していましたが、お答えは「特にありません。強いて言うなら多くの人と触れ合うことです。」という想定外のものでした。資格取得などは就職してからでもできる、時間のある学生のうちに多くの人との関わりを経験しておくべきとのこと。四つめにLINKAI横浜金沢の利点です。最も良い点はアクセスが良いことだそうで、車だけでなく金沢シーサイドラインなど鉄道を利用してお客様のもとにすぐに行けることはかなりの利点だとしていました。また、住みやすい環境が近くにあることもワークライフバランスを考える上での長所になるそうです。

藤森工業さんは、製造を通じて社会や人のために働く、魅力あふれる企業様でした。



だと感じました。

仕事以外の社内交流も盛んで、コロナ禍以前は納涼祭などのイベントで社員同士の交流を深め、そこで新たな出会いがあったりお互いに刺激を受けていたりしていたそうです。事業所や研究所の所属に関係なくこのような交流ができるそうで、とても楽しそうでした。コロナ禍からの回復が待たれます。

今後社会に出る学生に向けて、次の4点を伺いました。一つめは仕事のやりがいについてです。藤森工業さんの代表は「ユニークなものを世に送り出してこそが製造業だ。」という考えを持っていらっしゃる、社会に対して技術の向上で貢献することにやりがいを感じているそうです。製造業というモノを扱う企業も最終的には社会や人のために働いているということに改めて感じました。二つめに現在の学生に求めるものです。勤務年数を重ねていくと仕事の知識は増える一方、視野もその領域に特化していきがちです。学生にはまず柔軟な思考や何にでも疑問を持つ思考、そして変化に対



Interview with 横浜環境保全株式会社 by：関東学院大学 / 佐藤匠、佐々木美知、宇佐環樹、村松隼門、沖口陸

パッカー車がつなぐのは 「子どもたちとその未来」



横浜市で見かける絵などが描かれているパッカー車（※塵芥車、ごみ収集車のこと）。
実は、横浜市内の子どもたちがデザインしたパッカー車なんです。横浜環境保全さんは、企業から廃棄物を収集し処分する活動とともに、堆肥へのリサイクルも行っています。また、デザインパッカー車といったプリント事業も行っており、街を快走しています。子どもたちの未来のため、そして地域社会へ貢献するためにさまざまな事業に取り組んでいます。



カラフルなパッカー車といえば 横浜環境保全

みなさんはカラフルなごみ収集車が横浜市金沢区でごみを回収しているのを見たことがありますか。このごみ収集車は通称「パッカー車」と呼ばれています。このカラフルなパッカー車は横浜環境保全の皆さんと地域の子供たちが協力して生み出しました。元々は、規制のなかった産業廃棄物車両ではじめた活動でしたが、横浜環境保全さんの取組が横浜市にも認められ、2019年からは一般廃棄物車両にもカラフルな塗装を施せるよう自由化されました。横浜環境保全さんは、自由なデザインをトラックなどの大きな車体にもプリントできる事業を開始するとともに「デザインパッカー車」を作りました。地域の学校に通う生徒さんたちに対してデザインコンテストを開催し、生徒さんの自由に発想された絵をパッカー車にプリントしています。デザインされたパッカー車は今日も地域を走り、地域のゴミを回収しています。カラフルなパッカー車を見たら地域の子どもたちと地域環境をつなぐ横浜環境保全さんです。

また、横浜環境保全さんは、このパッカー車と共に金沢区のごみを回収することで社会貢献をしています。みなさんはどのような社会貢献をおこなっているか知っていますか？ 続いて、カラフルなパッカー車が運ぶ「ごみ」のゆくえを追ってみましょう。

横浜市金沢区のごみがどこに運ばれるか知っていますか？

みなさんは「ごみ」がどこに運ばれているか知っていますか？ 横浜環境保全さんは、金沢区でもごみを回収・運搬しています。回収されたごみの一部はリサイクルの工程を介して、再び私たちのもとに新たな資源として還元しています。横浜環境保全さんは、ごみ回収を通して資源が循環する社会を作り続けています。

では、どのようにして再資源化して私たちへと循環させているのでしょうか。

横浜環境保全さんは、ごみの種類によってリサイクルの仕方を変えています。お弁当やパンなどの食品廃棄物は安全・安心・無添加の有機肥料「ハマのありが堆肥」へリサイクルしています。この肥料を使い育てた農作物（山梨県道志村）を飲食店で利用することで、私たちにかえってきています。この「食の循環（フードループ）」の活動が認められ、横浜型地域貢献企業のプレミアム表彰を受賞しています。また、生ごみを燃料へと変え、バイオマス発電所へ供給することで私たちが使う電気にも変えています。ビンやペットボトルは念入りに分別することで、私たちが使う服や食器などに姿を変えリサイクルされています。横浜環境保全さんはこれらのリサイクルを通して、私たちや子供たちの未来を守るため、持続可能な社会に貢献をしています。

Interview with 横浜プレジジョン株式会社 by：関東学院大学 / 阿部真弓、山口莉音、須田理華子、小林篤人

最先端の裏側へ 次はあなたがつないでゆく



何気なく目にしている「金属めっき」は、実生活のすぐ近くで行われていた。創業77年の歴史を持つ横浜プレジジョンは、地球環境に常に配慮し、めっきに関する技術開発を続け、自動車部品だけではなく宇宙・航空関連部品にまで及んでいる。その技術は長い年月をかけて「めっき」のように丁寧に厚くぬられ、最先端を歩み続けている。



私たちが何気なく目にしているものは、
実にさまざまな人びとによって丁寧に作りこまれていた。

その実情は目に触れることはないが、裏側は実に身近な工場であった。

今、本誌を置いて周りを見渡してみると、改めて私たちの身の回りには「めっき」が施されていることがわかります。細菌の繁殖を防ぐために食器や衣服に金属が「めっき」処理がされていることはもちろんのこと、スマホやゲーム機の電子機器は「めっき」がなければ軽量化・小型化は実現できません。何気なく手に取ったものには、装飾・防さび・機能性の向上のため、「めっき」が施されていることがほとんどです。

「めっき」を見つけることはできましたか？意識していないと気が付きませんが、その技術は確かにあなたの周りに沢山あります。

鳥浜に位置する横浜プレジジョンさんでは、めっきを用いた事業展開を行っています。「めっき」は、綺麗に見せる装飾性、金属を錆びにくくする防食性、機能を付与する機能性などの様々な役割をもちます。横浜プレジジョン

さんでは、宇宙や航空関連部品への貴金属めっきを取り扱っており、空や宇宙といった地上とは異なった環境下でも耐えられるような部品づくりを行っています。

横浜プレジジョンさんの実際のめっきラインの工程を見学させていただきました。自動の亜鉛めっきラインや全自動の錫めっきラインを拝見し、パネ部品にめっきされる過程で、複雑な形状に均一にめっきされていることは改めて印象的でした。また、完全無公害の自動式を取り入れていることにより、部品のめっきの出来上がるまでのスピード感と技術力の高さが製品からも見ることができました。

私たちが普段目にして手に持っているめっき製品の裏側を拝見して、その「めっき」に隠れた美しさを知ることができました。

実生活のすぐ近くで行われていた
「めっき」は、とても縁深いもの

めっきといえば、今回インタビューを行った我々の所属する関東学院大学も1962年に世界で初めてプラスチックめっきの技術を開発し、国内で量産化しました。このことから「めっき」とは縁を感じていました。

横浜プレジジョン代表取締役社長の鈴木佳則さんに、会社やめっき事業に対する想い、横浜市金沢区への考えについてお話しをお伺いしました。鈴木社長はやさしい雰囲気におかれ、相手目線でわかりやすく丁寧に事業内容や施設の概要を説明してくださいました。会話の中で出てきた「従業員がいて私がいる」には深く感銘をうけ、世界水準の品質と技術の高さには、この考えを支持する従業員の方々の支えがあってこそだと感じました。

工場見学内においては、若い方が多いことが印象に残りました。平均年齢も35-39歳と若く、若い人たちへの教育も十分になされていることを感じました。鈴木社長の人柄があってこそ、めっきを通して人の役に立つ技術を発見・確

立させたいという思いをもって、事業に実現させることができるのだと思いました。最後に、鈴木社長が所属する研究室の指導教員が同じ大学出身であることも知り、改めて「縁の深さ」を感じました。今後も、大学および研究室を通して、共に「人が幸せになる術を常に考えて行動」していきたいとの思いを新たにしました。



Interview with 渡辺商事株式会社 by：横浜市立大学 / 小澤伽奈、伊藤乃愛、島田咲都

一人一人と真摯に向き合い、 相手のニーズを重んじる。



渡辺商事株式会社は業務用食品卸売事業、在宅通信販売、店舗販売事業を行っている会社です。「だし」の販売から始まった会社が、医療介護福祉食品の卸売まで事業を拡げ、今では神奈川県内の多くの病院や介護事業所と取引しています。



食品倉庫の膨大な種類の商品から、
取引先のニーズに応える真摯な姿勢を感じました。



渡辺商事さんの根幹ともいえる食品倉庫を案内していただきました。広い倉庫には、介護食品や医療食品などスーパーで目にする事の少ない専門的なものから、おせんべいやケーキなどの私たちにあって身近なものまで幅広い種類の商品が並んでおり、見ているだけで楽しくなります。その中でも扱う種類が多く、印象に残ったのは「とろみ剤」でした。飲みこむ力が低下したお年寄りや患者さんの誤嚥を防ぐため、医療や介護の現場では食事にとろみをつけて提供することがあります。病院や介護事業所が主な取引先である渡辺商事さんでは、それぞれのニーズに合わせたとろみ剤を卸せるよう、使用方法やとろみの持続性などが異なる数多くの種類のとろみ剤を取り扱っています。しかし、初めから多くの種類を扱っていたわけではなく、取引先の方や渡辺商事さんで働く栄養士と対話を重ね、どのような商品が必要かを一緒に考えることで種類が増えていったそうです。まさに、取引先一つ一つと真摯に向き合ってきた努力の賜物です。

膨大な商品の取り扱いによって取引先の幅広いニーズに対応する。渡辺商事さんが神奈川県内の多くの病院や介護事業所から必要とされる所以を、目で見て実感することができました。



独特な事業展開の経緯から、
患者さんや従業員との継続的な
つながりを大事にする姿勢が
見えてきました。

医療介護福祉食品の卸売事業を展開している渡辺商事さんですが、昭和40年(1965年)の創業当時は「だし」の卸売を行っている会社でした。卸売を行う中で、病院や高齢者施設など特殊な食事を提供している施設に食品を卸すことのできる会社が少ない点に着目し、お客様のニーズに応えながら一品ずつ積み重ね、現在の事業を展開してきたそうです。その結果、今では5,000品目以上の商品を揃え、神奈川県内の病院や高齢者施設の約90%と取引する会社にまで発展しました。さらには防災用品事業や、在宅療養・介護に応えるためのインターネット通販、店舗販売も行っています。

お話の中で感じた渡辺商事さんの魅力を二点お伝えします。一点目は、お客様の声一つ一つに丁寧に寄り添う会社であることです。渡辺商事さんでは「営業配送」を基本としており、取引先とのコミュニケーションの中から詳細な要望を聞くことで、各取引先でのニーズに対応しているそうです。従事する従業員の方々にとっても配達だけではないやりがいになっています。またインターネット通販においても、退院後のお客様に寄り添い、専門知識を持った栄養士が商品や栄養成分などの相談に乗ってくれます。二点目は、取引先との「継続する取引」を大切にしていることです。お話を伺う中で、目の前の数字や利益のみに力を入れるのではなく、取引先の病院の患者さんを思いやった取引をしていることがわかりました。また、コロナ禍において、会社の経営方法や従業員の働き方を改革したそうで、取引先だけでなく自社の従業員の生活も大切にしていることを実感しました。

取材を通じて、渡辺商事さんはきめ細やかな事業展開と対応を続けてきたことがわかりました。人とのつながりや信頼関係を大切にしている素敵な企業でした。





編集後記

“学生による学生のためのLINKAI横浜金沢PR冊子”をテーマに、金沢区にある二つの総合大学、関東学院大学・横浜市立大学に通う学生と初めて顔を合わせたキックオフミーティングからこの企画はスタートしました。

本誌を手に取った大学生をメインターゲットに、LINKAI横浜金沢の“働く魅力”を発信するために、両大学の友野研究室、堀田研究室、中西ゼミの学生と先生には企業への取材をはじめ、写真の撮影や選定、原稿作成にいたるまで協力いただき、無事に完成を迎えることができました。

また、今回取材を受け入れていただいた全10社の企業の皆様におかれましては、温かく学生を迎え入れていただき、とても感謝しております。タイトルにもある通り、学生は取材前、怖い人だったらどうしようと不安でいっぱいだったそうです。ですが、普段見られない働く現場を見学したり、商品やサービスの熱心な説明を受けるにつれて、学生から強張った表情がなくなっていきました。取材をもとに学生が一生懸命書いた文章は、どれも皆様の働く姿に感銘を受けたものばかりでした。これからも皆様の力で、LINKAI横浜金沢の産業を盛り上げ、支えてください。

取材後に実施した学生座談会では、「このままLINKAIを知らないのはもったいない」、「一社一社がしっかり個性を持っていて面白い」といった声が多くありました。地域と学生の交流を通して、魅力がしっかり伝わっていることを実感し嬉しく思います。

結びに、この企画に関わっていただいたすべての関係者の皆さま、至らぬ点も多々あったと思いますが、ご対応くださりありがとうございました。改めて厚く御礼申し上げます。

金沢区役所区政推進課

